
鬼戦記～黒と白～

真鍋 蛭火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼戦記〜黒と白〜

【Nコード】

N0099Z

【作者名】

真鍋 螢火

【あらすじ】

黒が禁忌とされた時

一人の少女を中心に復讐の渦が回り出す。
その最中、二人の恋人が相対する。

プロローグ（前書き）

始めました。暇潰しにお使いください。

プロローグ

世界を統べる者『十三光使^{じゅうさんこうし}』

彼らは黒を忌み色とし、黒を持つ者を殺した。

生まれたばかりの子でも、王の子でも・・・

黒を禁忌としたのは「力を持ちすぎ」だからだそうだ

黒は力の象徴とされる色

だが、あくまでも黒は『象徴』に過ぎない。
はつきり言って狂ってる。

だが、人はそれを受け入れた。

その人も狂ってる。

そんな時、鬼神族^{おにがみ}の王の子が黒を持って生まれた。

周りの声を恐れた王はその子を殺そうとしたが、王にそのような度胸は無かった。

その子は城に幽閉され、陽を見ることが無く鬼の歳で6の少年となった。

その時、城では世継ぎの問題が起きていた。次に生まれた子が知の象徴とされる白を持つ女であったからだ。

白は禁忌の真逆とされる聖色であったがその子は女

力の王とされる鬼神の長にはなれなかった。

そしてマズイ事に黒を持つ子である兄を見つけ、慕い始めた。

黒を持つ子を産み、心労に侵されたままの王妃は白の子を産み、死去

それによって王は愛する者を奪った黒と白を国から追放し、
12の黒の子と6の白の子の運命が別れた。

私の名はリアン。白髪赤目の人間で17の容姿の鬼神だ。復讐の為に、何人も人を殺した。罪悪感はない。

一番の目的は兄を殺した『十三光使』4か月前、その9人目を殺した。

10人目を殺すために新たな国へ足を踏み入れた。まずは商店街に入る。

猫を追う子供・買い物客・商人様々な人が居る中近寄りがたい雰囲気
を放つ私に声を掛ける男がいた。

「すみません」

「・・・・・・・・」

無言で横を向くと花屋があり私の目の前で跪すずく青髪青目の青年がいた。そして手に持つ白ゆりを私に向けた。

「この花を受け取ってくださいませんか？」

男が女に花を渡す行為は俗にプロポーズと言う。
期待を込めた青い眼差しを1秒ながめて、地面に転がる小さな石を
広い、男の眉間に投げた。

ビシッ！

「・・・！！・・・」

男は痛みに悶絶しながら額を押さえた。

「・・・っ・・・！！・・・」

私は心から溢れる何かを抑え、宿に向かった。

プロローグ（後書き）

未永く読んでもらえるとありがたいです。
お付き合いをよろしくお願い致します。

青き青年

僕はギルバート。青髪青目のキングエルフだ。キングといっても王位は弟に押し付けだし、大した事のない男だ。人間の容姿で20歳ぐらいだね。

あ、言い忘れたけどエルフといっても耳は尖ってないよ。魔力沢山の人間はキングエルフって覚えてくれていいよ。

そんな僕は家にも花でも飾ろうかな〜と思って花屋に行っただよね〜そして花を選んでたら不思議な気を感じて振り向いたら彼女が居ました。

白いショートヘアに赤いギラギラとした瞳、桜をあしらった衣姿は美しく、僕ビジョンでキラキラフレームがついてました。ひとめで恋に落ちました。

僕は迷いません。声を掛け、その場にあった白ゆりを手に取り跪ずいてこう言いました。

「この花を受け取ってくれませんか？」

すると彼女は石を拾い、僕の眉間に投げました。

ビシッ！

「・・・！・・・っ・・・！！・・・」

痛いですが、凄く。悶絶してたら彼女は行ってしまいました。慌て追いかけて掛けようとしたら

「あんた！金を払わないとは・・・いい度胸だね！」

「ご、ごめんなさい！」とポケットから適当な額を出し、駆け出しました。はい、額はさすってます。

彼女を追っていましたが、複雑な路地で迷子になってしまいました。

家に帰った時は夜です。白ゆりもしなしになっちゃいました。魔法で体を清めて、適当に食事しました。ベッドに入りましたがなかなか寝られませんでした。

正しい撃退方法（前書き）

リアン視点

正しい撃退方法

何なんだアイツは！

宿の部屋で、リアンは同じルートを同じ動きでウロウロと徘徊していた。

初対面で名を名乗らずにいきなり求婚してくるなど……あれか！アイツは俗称で「女たらし」とかいうヤツなのか！

「ええい！気晴らしに外に出るか……」

まだ陽が上りきっていない中、リアンは宿の庭にある花壇の前に佇んでいた。

何故だ！ちっとも気が晴れんぞ！寒いし眠いし……アイツが頭から離れんぞ！

「やあ、おはよう」

「！？」

気が付いたら横に『アイツ』がいた。

「おゝまゝえゝ！」

自分でも恥ずかしい程に声が枯れていた。言つた事は取り消せないが・・・無かつた事にするぞ。

「えーと、僕はギルバートです。貴女は？」

空気を読め。私が帰れオーラ出しているのがわからんのか

「わ、私はお前とじゃれあつつもりはないぞ・・・興味の無い者に、名は名乗らん」

「・・・・・・・・・・」

何故黙る！私があか言わねばならないじゃないか！

「あー、言つたら帰るか？」

「・・・・はい」

まで、最後凄く悲しいぞ。声が下げ調子・・・私が酷いヤツみたいじゃないか・・・・と、とりあえず帰つて貰うぞ！

「・・・リ・・・アン・・・よし！帰れ！」

待て自分！何故名前を言うだけでこんなに疲れた！

「リアン・・・貴女にぴったりのいいお名前ですね！」

「わかつたから帰れ！」

翌日からギルなんとかが毎日アタックしてき始めた。

『撃退方法 その1』

石投げる(二回目)

「愛しの白き君、リアン・・・我が手を・・・」

ビシッ！

「・・・っう・・・あ・・・」

『撃退方法その2』

逃げる

「リアン、おは・・・あれ？」

『撃退方法その3』

無視

「リアン、よかったら今日僕の家来ない？」

「・・・・・・・・」

「？・・・・リアン？・・・・・・オーイ」

『撃退方法その4』

とにかく帰れ・来るなオーラを放つ

「リアン！一緒に花でも見に行かないかい？」

（帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな）

「あれ？花・・・・嫌い？」

（帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな）

『撃退方法その5』

殺気を放ちながら睨む

「ねえリアンー」

ジロリ

「やだなー、そんなに見つめないでよ」

【結果】

ギルバートは空気読めない & a m p ・ 諦め悪い

石と思考

くそっ！全部失敗した・・・次の手が思い浮かばん！・・・
・・・というより・・・

「私は何故あんなヤツを気にしてるんだ？」

疑問が外部に放出される。

「だいたい、いつもならすぐ邪魔者は消すのに・・・私はどうした！」

朝っぱらから一人、庭の花壇に叫ぶリアンは他者から見れば異様だ。

「ていうか、アイツもアイツだ！キングエルフなら【魅了】^{チャーム}を使えば良いものを・・・正々堂々落としに来るとは・・・こつも清いと腹立たしいぞ！」

・・・
・・・？

「いつもならこの時間に来るのに・・・」

『諦めた』と、結論付ければ良かったが・・・リアンにはできなかつた。

「諦めた・・・のか？・・・呆れたそ！その様に薄い恋心に・・・まったく！男なら最後までやり・・・通・・・せ・・・？」

だから何故私は気にしている！しかも思考が矛盾だらけになってるぞ！

「おはよう。リアン」

「っ！」

来たか元凶！また私の思考がおかしくなる・・・

「花を選んでたんだ。」

選んでいい！ああ、コイツといるといちいち反応したくなる・・・

「はい、どうぞ。」

ギルバートは膝き、リアンに白ゆりの花束を向ける。同じ様に純粋な笑みもだ。

「白ゆりが気に入ってもらえなかったみたいだから・・・リーアラにしたよ。」

『リーアラ』別の名は【絆の花】又、【愛の花】と言われている形は白ゆりに似ており色は純白。

コイツ！懲りて無い！

リアンが睨んでいるのに気付かず、ギルバートは相変わらずリーアラの花束と笑顔を渡してくる。

な、何なんだ・・・・・・コイツ・・・・・・

とりあえず石を取り、眉間へ投げる

ビッシ！（二回目）

「……！」

ええええええええ！これ三回目だぞ！いい加減学習し・・・

「う……クク……ハハハ！」

「え？リアン？」

「っ！……お、お前が笑わせ……フッフッフ……」

「
・
・
・
・
・
酷いな
・
・
・
」

「いや、スマン・・・なんか、こつも容易く受けるとは・・・
お前はキングエルフだろ・・・ふふふ・・・避けるか弾く
かすると思ったのに・・・三回も受けるなど・・・」

ああ、落とされたな……私は

普通の展開（前書き）

ギルバート視点とリアン視点

普通の展開

やっと、リアンが振り向いてくれました。でもツンツとしてます。名前も呼んでくれないし……。道は遠いです。あ、そうだ宿にいつまでも居るのは金銭的に辛いと思うので同居させました。「絶対嫌だ」と言われたけど「城に近い」と言ったら渋々「わかった」って言うてくれました！でもなんで『城』が重要なのかな？聞いたら「うるさい」って言われたよ！

「部屋は何処を使えばいい」

あれ？「？」が語尾に無い……。気のせいかな？

「2階の廊下の右側の突き当たりだよ」

「案内しろ」

「？……うん」

案内いるの？簡単にわかりやすく説明したけど？

「早くしろ！」

「え？あ、うん！」

リアンを連れ、階段を上がる。リアンの血色の目から放たれる視線がギルバートに刺さっているが等の本人は気付いていない。

うん。リアンが案内してって言ったの何でかな？右左わかればわか……。あ、あれ？

「あゝ、リアン・・・もしかして右左わかんないの？」

ビシッ！ドスン！

ギルバートは一段目から再び、階段を上ることになった。

まったく！私は何故ここにいる！

ギルバートに用意してもらった部屋のベッドに乱暴に腰掛けた。

それに！あんなに笑って・・・しかも落とされたなどと・・・
・・・わ、私は認めんぞ！

自分の思考が矛盾しているのに気付かず、リアンは先程受け取ってしまった花束に目をやる。右手でしっかりと持っていた。

・・・あんなヤツがくれた花など・・・いらん！絶対いら・・・

右手を上げ、花束を地面に投げつけよう手するが・・・

「・・・・・・」

ゆっくりと右手を下ろした。

「・・・・綺麗・・・・」

花束をと抱き締める。甘い香りが漂って来た。

「アイツに・・・礼・・・した方が良いかな・・・」

脈が早まるのがわかった。

私は『十三光使』に復讐できれば良い・・・・こんな感情など・・・・
・・・・・・知らないのに・・・・・・

始めは厄介なヤツだと思っていた。でも毎日あんなに笑い掛けられ
たら・・・・・・惚れても仕方がない・・・・・・

私が・・・・二人いる？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099z/>

鬼戦記～黒と白～

2011年12月10日18時56分発行